

法師峠(大田原南金丸・根本)

歴史と伝承に彩られた法師峠

NASU FARM VILLAGE(馬牧場)と那須野ヶ原カントリークラブ(ゴルフ場)との境にある丘陵の頂上付近に、「法師峠」と呼ばれている場所がある。

古代の東山道駅路や中世の秀衡街道と近い頂上の林の中に加茂神社が残り、弓の名手那須与一と文武両道の西行法師との出会いを語る伝承を醸し出している。



加茂神社(地元では「鳴井山(なるいさん)」で知られる)

境界の文化誌を語る法師峠

蓮実長著『那須郡誌』(一四、金田村法師峠)には、那須与一が幼少のころ、この地で旅の法師から弓を射ることの伝授を受けている。すなわち、与一宗隆がこの地に来て揚雲雀を射落として楽しんでいる時、一人の旅僧が通りかかり「小鳥を射落とすとは、甚だ無惨である。殺さぬように射なさるがよい」と言い捨てて行ってしまった。

法師峠とは、標示処(ぼうじど)の意であり、かつては、法師峠と書いて「ボウジド」と言っていたものを、法師の意味を忘れてしまっただけか、或いは、殊更に与一の弓の稽古をあらわすために前記のような説話になったものと思う。

この地は湯津上村と南金丸との境界であり、頂上近くに雷神様を祀った大木がある。(大田原晴雄、1989『那須野の地名』那須文化研究会 より)



一瞬北海道を思わせる法師峠付近の景観

法師峠で出会う西行法師と那須与一

(蹴爪のない雲雀①)

文治2年(1186)7月、西行法師が奥州藤原秀郷を訪ねる旅の途中、鎌倉で源頼朝に兵法や和歌を指南する。平泉で秀衡の歓待を受けた西行法師は、都に帰る途中、那須野の鍋掛に泊り「中野の楓」を聞き訪ねる。

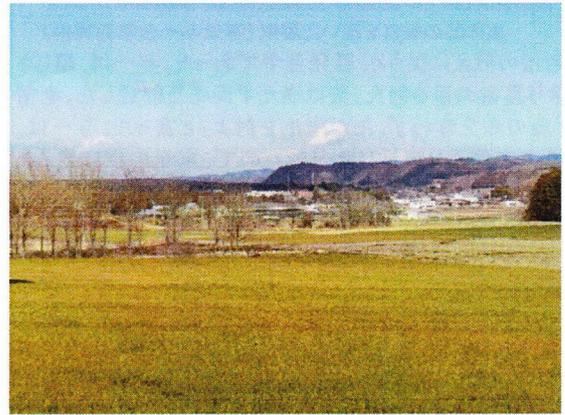
すると、一人の美女が現れ「古人は万葉錦木と呼びました」と告げて消える。不思議に思った西行法師は、

たづぬれば青葉の梢色こくて

何もたえせぬにしきなるらん

と、詠んだ。

同じ頃、与一宗隆が中野の辺りで雲雀を数知らず射落としていた。西行法師は「さてさて手だれの射手なり」と感心して見ていたが、雲雀を殺すことの無意味さと生きのまま射る方法を教える。



法師峠の途中から高館城を臨む

与一の館(高館城)に宿した西行法師は、与一の案内で堀之内の乾養院(現御堂地観音堂)の名木糸桜(枝垂桜)を眺め、

さかりにはさぞな青葉の今とても

心ひかるる系ざくらかな

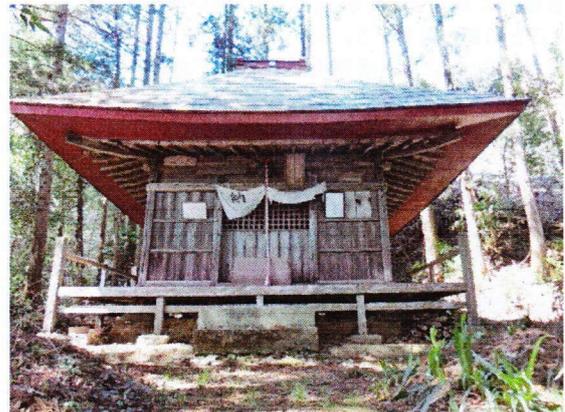
と詠み、和歌を枝に結び付け、さらに

東にも花見る人もあるやらん

色香ものこる系ざくらかな

と詠み、与一宗隆に別れを告げ京に旅立った。

(大金重貞著『那須記』黒尾東一編、1969 より)



西行伝承を伝える乾養院(現御堂地観音堂・堀之内)

法師峠のなぞの僧と那須与一

(蹴爪のない雲雀②)

(前略)その頃的那須一族は、那須太郎より九郎までは平家方であった。その中での源平合戦、十郎為隆と与一宗隆二人は未だ何れへも出仕せず、毎日山野に出て鶉雲雀を狩り、那須野で弓馬の道を訓練して過ごした。

ある時、与一は例のごとく狩に出て小高き所に馬を留め休んでいたが、どこからか老僧が現れ、与一に「汝射芸を習わんと思はば我れ教えて得さすべし」と言った。(中略)



扇の的の誉れを描いた屏風(那須与一伝承館提供)

老僧の教えに従うと、百発百中であった。与一は、嬉しさの余り雲雀の目を射た。矢は過たず両眼を射通した。老僧は「鳥の命を奪わず、ただ蹴爪を射よ」と言った。与一は、老僧の言葉通り蹴爪ばかり射たので、末世の世に至るまで、那須の雲雀には蹴爪がないと言われた。(中略)

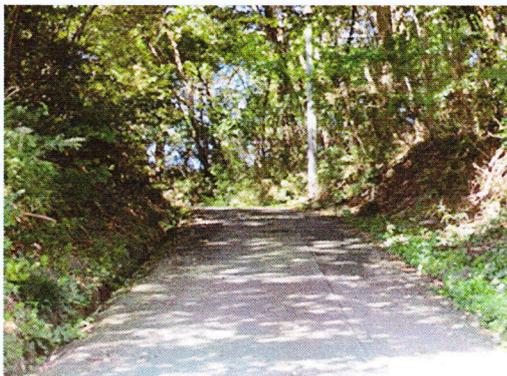


古代・中世の歴史・伝承を語る那須神社

さて、不思議に思った与一は、使いの者に老僧の後を追わせたと、老僧は津加武山の上の小社(のちの那須神社)に入るように消えていった。使いの者は、驚き帰ると与一に一部始終を話した。与一は「老僧と見えたのは、八幡大菩薩の化身であったか。」と、北に向い伏し拝んだ。

ここを法師ヶ峠という。高館の城より法師ヶ峠へは十五町、法師ヶ峠より八幡宮までは十町である。

(木曾武元著『那須拾遺記』針生宗伯編、1970より)



法師峠に登る坂道(湯津上根本地区)

殿様も江戸の往来に通った法師峠

江戸時代の黒羽藩の記録に、法師峠に関わる記述が残されている(『創垂可継「年中行事 六月の部」』文化14[1817]柏書房刊1968)。

御初入(殿様始めて江戸に上り、お帰りの時)の節は、浄法寺家、福原(佐久山町の次)迄、羽織袴にて罷り出る。常日は自分門前坂下へ罷り出る。徒目付壹人、徒士参人、旅装束にて福原迄罷り出る。御初入は物頭二人、倉骨迄、羽織袴にて小頭並びに組の者(小頭役の者)召し連れ、罷り出る。残りの分は、廊下橋下枡形へ出る。常日は清水坂迄、組の者召し連れ、壹人罷り出る。残りの者は、御初入入断、金丸八幡神主、倉骨坂下迄出る。大宮神主、一乗院、光明寺、脊負松迄出る。御初入は、大小姓並びに中小姓清水坂迄羽織袴にて罷り出て、残らず御供の事、常日は同所大小姓六人、中小姓六人罷り出て御供致し、残りの大小姓並びに祐筆残らず御隠居様御付きは、那珂川河原へ罷り出て、清水坂へ徒士残らず、乗馬医は、大豆田迄出る。(以下略)

※文中の「脊負松」は、法師峠の頂上にあつたと伝わる。



参勤交代の歴史も刻む清水坂(黒羽大豆田)

法師峠と歴史の道

古代の東山道・中世の秀衡街道(奥大道)、そして、近世は奥州道中や原(方)街道も近くを通過していた。

法師峠の道は、西に向かうと、箒川を渡って福原から奥州道中につながり、喜連川から氏家、そして、宇都宮へと向かう。

喜連川の鹿子畑は、浄法寺高勝の弟鹿子畑(岡)豊明の先祖の地で東山道が通っていた。浄法寺家の先祖の地(現那珂川町浄法寺)にも、東山道が通り役所があった。

